

【アドミニストレーション】

ソニーマーケティング学生ボランティアファンドについて

【はじめに】

このファンドは、大学生の社会参加への第一歩となり、また、社会をより良くしていこうとするリーダーシップの芽生えとなるようなボランティア活動を支援することを目的とし、ソニーマーケティング株式会社の提案により、日本初の全国の大学生ボランティアを対象として2001年から始まった。当初より本学ボランティアセンターが事務局を担当し、ボランティアセンター業務としても当時も今も活動の柱の一つである。発足後の経緯については過去の明治学院大学ボランティアセンター報告書（以下報告書）第1号から掲載の通りであるが、関係各所から産学共同企画として高い評価を得て、現在に至るまで安定した応募を得ていた。

（ソニーマーケティング学生ボランティアファンド HP 参照 <http://www.sony.jp/CorporateCruise/Volunteer/index.html>）

【第13回助成】

2013年10月に第13回目の募集を行い、応募総数67団体の中から24団体が助成対象として決定された（報告書第10号77ページ参照）。助成団体には初めての試みとして2014年1月に企画発表会を開催し、他の助成団体との交流とともに刺激を受けたうえで活動に取り組んでもらい、7月には活動報告会を実施した。報告会では5月末までに提出された活動報告に基づき編集された活動報告ビデオ上映とともに、希望する助成団体には肉声での活動報告プレゼンテーションをおこなってもらった。

【制度の転換点】

第13回助成団体の活動が行われる一方で、当ファンドの今後のあり方について大きな動きがあった。パートナーのソニーマーケティング株式会社より当ファンドを第13回までとしたいとの申し出があった。事務局を担当する本学としては事務局としての感触から助成は必要であり、引き続き制度としての継続を希望したが、一助成制度の話ではなくソニーグループ全体の業務見直しの中の決断ということで申し出を受け入れることとした。ただし完全撤退ということではなく、当ファンドの趣旨に賛同し、形を変えて大学生ボランティアに対して助成を継続することが可能となれば、助成団体選考、機材や会場提供といった部分で協力関係を継続することを確認した。

【おわりに】

上述のように当ファンドは第13回を持って幕を閉じることとなった。しかし、別途記したように日本財団学生ボランティアセンターを新たなパートナーとして助成制度をスタートすることとなり、すでに選考を終え、活動を始めている。一方で最後の助成団体となった24団体の一部は、現在も助成対象となる活動を継続している。これらの助成団体に対しては引き続き助成金使途報告が提出されるまで活動を見守る所存である。最後に、当ファンド構想を提案していただき、13年間にわたり物心両面でパートナーとして活動を展開したソニーマーケティング株式会社関係者の皆さまに対し、この紙面を借りて御礼を申し上げます。

（波多野）

Gakuvo Style Fund について

【はじめに】

全国の活動資金が必要な学生ボランティア団体に向けて助成を行ってきた「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」に替わる助成制度として、「Gakuvo Style Fund」（以下 Gakuvo）がスタートした。本号 83 ページの「ソニーマーケティング学生ボランティアファンドについて」にて触れたような経緯があり、助成制度の空白をなくすために、ソニーマーケティング株式会社と明治学院大学は、事務局を明治学院大学ボランティアセンターが行うという前提でファンドの趣旨に賛同してくださる企業・団体を探すために活動した。

その結果、日本財団学生ボランティアセンター（以下ガクボ）が関心を示し、双方において組織内での承認手続き、事務的調整を済ませ、10月7日（火）付でパートナーとして助成制度をスタートさせることとなった。様々な活動に適切な助成をおこなうために三つのコース、こらぼ（既存の枠組みを超えた活動 Aコース）ゆるぼ（活動を始めたいまたは始めたばかり Bコース）ばかぼ（精力的に活動を行っている Cコース）に分類し、助成対象期間は初回の事務的な制約から2015年1月から3月までとした。

【助成団体選考】

例年ソニーマーケティング学生ボランティアファンド報告書最終号（第13号）を送付する団体に対し、書面での経緯説明および Gakuvo 募集要項を送付するとともに、ガクボからも9月の定例記者会見で公表するなどPR活動に努めた。その結果、2014年11月21日（金）の締め切りまでに62団体からの応募を得た。書類選考で絞ったうえで、最終審査会では各団体に90秒の時間を与え、最終プレゼンテーションをおこなってもらった。この最終プレゼンで評価を大きく変えた団体が複数見られた。最終的には条件付き採択を含め45団体が助成団体として採択された。

【活動開始】

Gakuvo ではそれぞれの助成団体がこの3ヵ月でどのような活動を展開しているのか、他の助成団体からも見えるようにガクボホームページに活動紹介ページを用意し、都度活動内容を掲載出来るシステムを作った。早速2015年1月7日にミーティングをおこなったという初の掲載がなされると続々と掲載されるようになった。初掲載がミーティングという比較的ハードルの低いものであったのがミソで、これが海外でのイベント実施というような内容であったら掲載のハードルが高くなったであろうと、事務局としては胸を撫で下ろしている。執筆日現在ではさすがにCコースが出足・掲載頻度とも抜きん出ている。

【最後に】

活動終了後は活動報告会の開催を6月頃に想定している。最終審査会および日々のホームページによる活動紹介に刺激を受けつつ、当初想定した活動がどのように花開くのか、今から楽しみである。

（波多野）

ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2014 について

ボランティアセンターは、2006 年度からボランティアファンド（大学 HP 掲載）の受け入れをおこない、2014 年度は、2013 年度の売上高の 10% の 97 万 2968 円と過年度からの繰り越しを含めた額を合わせた 347 万 6894 円を運用している。このファンドを原資として、2007 年度に「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（通称ボラチャレ）」を設立し、学内のボランティア団体や新しく活動を始めようとするグループによる企画の実現を支援し、これまで 50 企画に助成をおこなった。

2014 年度の募集は、昨年度に引き続き「社会課題にチャレンジ！」をテーマとした。ボランティアという概念から枠が広がり、6 団体から 7 つのバリエーション豊富な企画の応募があり、取り組む活動テーマは国際協力、平和、震災、地域など多岐にわたった。

公開審査会が 2014 年 10 月 18 日（土）に白金校舎にて実施され、5 名の審査委員（ボランティアセンター推進委員の唐木富士子氏、可部州彦氏に加えて、本学からは鶴殿学長、原田ボランティアセンター長、西村ボランティアセンター長補佐）による厳正な審査がおこなわれた。続いて審査委員による審査会が開催され、応募 7 企画のうち 6 企画を助成企画として選定し、総額 41 万 7500 円を助成することで決定した。今年度で特徴的だったのは、企画内容に広報・啓発関連のものが大半を占めていたことである。それらが社会課題の解決にどのように結びついていくのかを再度考え、目的に向かって成果を挙げることを期待したいとのアドバイスがあった。講評はセンター HP に掲載をしているので参考にしていただきたい。各チームが競い合い、認め合い、充実した活動に繋がっていくことを期待している。

2014 年度受賞企画一覧

企 画 名	団 体 名
ボランティアサークル合同写真展・インタビュー小冊子	地域活動 M G V A
フィリピン 北ルソンで“豊かさ”と“自然とともに暮らすこと”を考えるスタディーツアー	コーディネリエラ・スタディーツアー 実行委員会
広報誌「TIMES」制作企画	特定非営利活動法人 JUNKO Association
フィリピン・パートナーシップ・プロジェクト	ハビタット MGU
ピースアクション	Peace ☆ Ring
冊子を作って陸前高田を知ってもらおう大作戦	Do for smile@ 東日本プロジェクト 陸前高田復興支援チーム

次頁からは 2013 年度受賞団体の活動報告書を掲載する。

(中山)

企画名：「変化」を生み出す～人と人がつながりながら“よりよい社会”を目指す船～
団体名：CHANGE Ship …「2013年度ボラチャレグランプリ賞」受賞

【目的】

「国際協力」＝海外ボランティアや募金活動という学生の固定観念を打破し、「世界をよくすること」は誰もがいつでもどこからでもできることだと気づいてもらうことを目的とした。貧困解決などの「国際協力」はごく限られた人しか関われないものだと、自身も入学当初は思っていたが、大学で学びや経験を重ねるにしたがって、日々の生活から参加できること、それを周りに広げることで変えられることがあると知った。例えば、水や電気などの資源を無駄にしないという小さなことでも、多くの人が実践すれば大きな力になり、ひいては気候変動を防げるかもしれない。だからこそ、団体の活動を通して、明治学院大学の学生に気づきのきっかけを与えて、広い視野で日々の行動を変えてほしいと思った。

【活動詳細】

① 11月：カップラーメンを食べて、コーラを飲もう！－地球の裏側を知る昼休み－

普段口にしていない身近なものを通して、それらの生産地や生産者の労働環境を考えるきっかけを与えた。10人ほどの学生にスピーチをしてもらい、その後のディスカッションの結果、商品選択に注意を払うようになったとのフィードバックが参加学生からあった。

② 12月～：「GROW ランチ－地球にもカラダにも優しい昼ごはん－」

①の後に行なった企画で、地球環境や生産方法に配慮された商品選択や地産地消の大切さを考えて実践する機会を与えた。当初予定していた隔週木曜日開催にはならなかったが、横浜で始めた企画は白金キャンパスにも広がった。

③ 5月：「Hunger Banquet－食料問題から考える、私たちと環境のつながり－」



ハンガバンケットのルール説明を受けている様子

世界の食料分配問題と地球温暖化が食料生産に与える影響を学び考える体験型のワークショップ。当日は40人弱の学生が参加、マスコミの取材も受けて翌日全国放送されことから、昨年度の参加者も見学に訪れてくれた。今年度の参加者からは今後も継続すべきだと言う反響をもらったことから、啓発活動の意義を知ってもらえたのではないと思う。

④ 6月：「1 Day for Earth —地球を考える1日—」

「国連環境デー」に合わせて、エコ行動（エネルギーを無駄にしない、食べ残しをしない、ごみを減らすなど）を促進するため、Facebookにてイベントページを作成して個々人の行動を投稿してもらった。予想以上の招待者数・参加者数になり、大学内に留まらない啓発活動となった。

⑤ 横浜生協に本の啓発コーナー設置

「国連環境デー」の前後の週に、「環境問題」をテーマにした本を置かせてもらった。隔週でテーマを決めて陳列したかったが、「国連環境デー」の一度のみの活動になってしまった。

【経過】

活動は不定期であったものの、日増しに啓発活動の意義に気がついてくれる人や理解を示してくれる人が増えているのを実感した。しかしながら、全体スケジュールの立て方が甘かったことや、常に活動しているのは代表と副代表の2人だったことから、授業に加えて留学準備やインターンなどの個人的な予定が活動予定にも響いてしまった。団体メンバーがもう少し多ければ、機会を最大に生かして活動できたのではないかと感じた。

【活動を通して得た学び】

内容面では大変有意義な学びを得た。それは、啓発活動は価値があるということだ。団体としてイベントを開催するなどの活動を続けていく中で多くの学生・教職員・大学外の人との出会いがあり、たくさんの方から大きな力を貸してもらった。例えば、生協で本の陳列をした際には図書館の方からも声をかけていただいたり、イベント開催に協力してくれたりする友人もたくさんいた。「世界をよくする」ための啓発活動は、大きな目で見れば貧困解決に繋がる。また、今回の活動では、物理的に距離があり、見えない相手である世界中の貧困に苦しむ人々に思いを馳せ、身近な人と一歩を踏み出すことは素晴らしいことだと実感した。まして特別な知識や経済力がなくとも誰もがができること。むしろ誰もができるからこそ素晴らしいのだと活動を通して気づくことができた。

【展望】

「CHANGE Ship」という団体としての活動は今年度のボランティア学生チャレンジファンド終了と共に終えるが、活動の一部はボランティアセンター海外プログラム事業部に引き継がれて、前述③のハンガーバンクが開催された。今後とも世界の貧困といった課題に取り組む「国際協力」は限られた人が関わるものという固定概念を変えられるように、個人としてサポートしていきたい。

(国際学部国際キャリア学科 学生)

企画名：使用済み天ぷら油のリサイクル

団体名：Life-U

廃食油の資源性を広めるというミッションのもと、イベントやワークショップを通じて、廃食油の有効利用に気づいてもらい、イベント後、使い終わった油をリサイクルするなどの action を起こしてもらうことを今回の企画の目標とした。

Life-U は、1 Day for Others（以下 1 Day）というボランティアセンターの 1 日社会貢献活動に参加した学生が中心となって活動している団体である。人数は少ないながらも、1Day プログラムでお世話になった株式会社ユーズ（以下ユーズ）と協力し、「第 6 回 We フェスタ」「アースデイ東京 2014」などのイベントに参加した。

「第 6 回 We フェスタ」は、震災復興支援を目的としたチャリティーイベントで、売上の 1 部を被災地に寄付するというものだった。横浜の神奈川県民センターで開催され、私たちはユーズにブースを提供してもらい、廃食油をリサイクルして作った石鹸を使い「デコパージュ体験」（紙に描かれた模様や絵の切り抜きを貼って物の表面を飾り、コーティング剤を塗り重ねていくこと。フランス語で切り抜く、切り裂くという意味がある。）をおこない、地域の方と交流しながら、自分たちのミッションを伝えた。また、メンバーのほとんどがイベント運営をしたことがなく、戸惑うことも多々あったが、次に予定が組まれていたメインイベントである「アースデイ東京」に向けてのよい経験が積めた。

「アースデイ東京」は環境関連の中では日本最大級のイベントで、4月19、20日の2日間にわたり代々木公園でおこなわれた。このイベントでは、キャンドルワークショップを開催し、私たちのブースに来てくれた方に廃食油で実際にキャンドル作りを体験してもらった。また、キャンドル作りだけでなく「廃食油に関するクイズ」に答えてもらい、楽しく学べるような工夫をした。さらに、参加者と積極的にコミュニケーションをとりながら、自分たちのミッションを伝えるよう務めた。

キャンドルワークショップは大盛況で、参加者が作り方を聞きに来てくれたり、かわいくデコレーションしたりと、楽しみながら体験していただくことができた。参加者としては、子ども連れの親御さんが多く来た印象があった。



「東京は大きな油田」 ペットボトルに入った廃食油

今回の活動で成功だったと思う点は、参加者にデコパージュやキャンドル作り、クイズへの参加という体験をしてもらうことで、廃食油の再利用について理解していただけたことだった。また、イベントに出展した他の団体の人と親しくなり、情報交換をすることもできた。そして、イベント運営を通して、今まで気付かなかった新たな発見もすることができた。具体的には、クイズのレベルを参加者に合わせて作ることや「キャンドルの作り方」を説明した表を配るなど、ただ体験してもらうのではなく、参加した一人ひとりが楽しみながら、何か得るものがあったと実感してもらうことが大切だとわかった。

反省点としては、準備不足やリーダーとしての経験不足で、ユーズやLife-Uの先輩たちに迷惑をかけてしまった部分が多々あった。今回の反省点は次の活動に活かしていきたい。

なお、今回のボランティアファンド学生チャレンジ賞でいただいた助成金での活動とは異なるが、Life-Uでは、ボランティアセンター主催の1 Day for Othersでもユーズにご協力いただいて、本学学生に廃食油のリサイクルについて知ってもらう活動をおこなった。社長自ら会社についての紹介をしてもらい、参加学生による石鹼デコパージュ体験、工場見学を実施し、さらには油の回収業務にも携わってもらった。

今後もボラチャレや1Dayの活動を通して知り合ったユーズの従業員の方々を始め、イベントで知り合った皆さんとのつながりを大切にしながら、活動を続けていきたいと思う。

(法学部消費情報環境法学科 学生)

企画名：Limelight

団体名：みなとメディアミュージアム（MMM）実行委員会（広報課）

私はみなとメディアミュージアム実行委員会というアートイベントを開催・運営する団体に所属している。みなとメディアミュージアムは、開催地であるひたちなか市の産業、運営の中心となる学生、人をつなぐための芸術の3つを柱とした産学芸一体プロジェクトだ。私たちは毎年8月に茨城県で、約1ヶ月間アートイベントを開催しており、地域の方やひたちなか市と協力しながらボランティア活動を行ってきた。この活動を通して、ボランティアにおける問題点を発見した。第一に私たちのような学生団体は多数存在しているにも関わらず、人脈や経験が乏しいために実現できないことが多いこと、



図1 グループディスカッションの様子

と、第二にボランティアに参加しているのは学生等若者とリタイア後、時間のある年配者が中心となっていることだ。先に述べたように、若者は社会との接点はあるが人脈、スキル、資金、経験が欠けており、それらの支援を求めている。その一方で年配者は若者に欠けているものを豊富に保持しているがリタイア後、社会との接点が希薄化している。そこでこの二者がうまくマッチングすれば 互いに不足分を補い合うことができるのではないかと考えた。

今回の企画名 Limelight には注目的、檜舞台という意味があり、学生の社会活動の支援拡大と年配者の社会や学生とのつながりを創出することを目的としたイベントを開催することにした。

イベントは当初トークセッションにする予定だったが、今回のターゲットである若者がそういった所謂「お堅い」ものに興味があるのか、自分たちだったらどうなのかを考えた結果、音楽イベントに変更し、第一回となる今回は年配者が若者の実態を知るということをテーマに開催した。コンテンツは大きく3つに分け、次のものに決定した。各地域で活躍する学生団体によるプレゼンテーションで「若者を知る」、次に多彩な人生経験を持つ参加者同士で議論を行うことで「若者と考える」、そして若者のパフォーマンスによって「若者に裏切られる」。「若者を知る」では、鳥取タクラミラボ、Yokohama Future Lab、みなとメディアミュージアムの3団体がそれぞれの活動についてプレゼンテーションをおこない、年配者からのアドバイスや学生からの質疑を受け、活動をよりよいものにするアイデアを得た。次に「若者と考える」では若者と年配者の会話が生まれやすいよう、来場者を3つのグループに分け、ディスカッションを行った。「初めて買った携帯」「初めて買ったCD」など話しやすいトピックで過去を振り返り、「一番欲しいもの」で現在を見つめ直した。最後には「今後の私たちにとっての豊かさ」について話し合い、未来を考えた。(図1) このグループディスカッションでまとめた各班の

考えは色紙に書いて発表し、全員で共有した。パフォーマンスでは、明治学院大学クラシックギター研究会によるギターの演奏（図2）に感嘆したり、大学生ラッパーによるパフォーマンスに驚いたり、普段ではなかなか触れることができない若者の一面を知ることができた。そして若者のクッキング



図2 クラシックギターの演奏

集団マロニー・チョロリーによる創作料理の提供（図3）もおこなった。そして最後には自由時間を設けたため、来場者同士による、さまざまな人との交流や新たなつながりを生み出すことができた。

Limelightの企画、実施を通して、さまざまな人と関わり、またそれを次に活かしていくことの重要性を改めて学んだ。企画の途中で出会った大人のサポートが今回のイベント成功に大きく関係していると考えて

いる。また、このボランティアフェンド学生チャレンジ賞に応募した際、「やってみたい！」という一心で始めた私たちが、何か行動を起こすことで変えられるものがあるのではないかと思えるようになった。

今後の課題としては定期的な開催が挙げられる。第一回となった今回は「年配者」が「若者を知る」「若



図3 若者による料理パフォーマンス

者と考える」「若者に裏切られる」など若者からの発信に重きをおいたイベントになったので、次回は年配者の活動を知ることができるイベントを開催したい。

（国際学部国際学科 学生）

企画名：KITO を知る！見る！感じる！プロジェクト

団体名：ZiVASAN プロジェクト

【はじめに】

ZiVASAN プロジェクトとは、社団法人イコールラボの中でおこなわれている地域活性化事業の一つである。徳島県那賀町（旧）木頭村におけるIターンやUターン希望者支援や山村留学事業、そして地域の名産物である柚子加工商品の開発などをおこなっている。2012年度からは本学国際学部の斎藤百合子教授と社団法人イコールラボ代表の玄番隆之さんが協力し、夏休みに学生をZiVASANプロジェクトのインターン生として受け入れる事業を開始した。

2013年8月、私たち3名の学生はインターンシップに参加し、木頭村で抱える問題が日本国内の多くの地域に共通する過疎化の問題と同じであることや地域産物の開発などの現状を知った。そして地域の人々の、「木頭村をどうにかして元気にしていきたい」という強い思いを理解することとなった。

今回いただいた助成金は、主に（旧）木頭村を明治学院の学生に知ってもらうためのプロジェクト（イベント）の遂行に充てた。

【企画の内容・背景】

（旧）木頭村住民の方から、地域を変えるためには『若者、よその、馬鹿もの』が必要だと聞いたことからヒントを得て、大学の中でできることを確実に形にしていこうという方向に固まった。

そして大学生という特権を生かして学内でPR活動をおこなった。学内での実施であれば、若者に木頭のよさや産物に直接触れてもらえ、かつ、日本の多くの地域（例：木頭地域）が抱える過疎化高齢化問題に関心を寄せてもらい、地域と学生を結び付けることができると考えた。そして、PR活動を通して、木頭地域の課題に興味を持ってもらい、次年度にも継続してインターン学生を輩出することでより多くの若者に、特産品の柚子や地域の魅力を知ってもらうことが可能だと考えた。

第一弾として、大学生向けに木頭を知ってもらうきっかけになるようなイベントを催したかったため、柚子加工商品試食会を2013年12月に開催することになった。準備の段階では、柚子加工商品を作る地域の業者と連絡を取り合い、商品ができるまでの流れを知り、柚子の効能などを分かりやすく学生たちに伝える方法等をオンラインミーティングにて検討した。

木頭に関するイベント第二弾として2014年1月に木頭地域を知る、見る、感じるワークショップを開催した。イベント内容は、地域の方を招く講演会と柚子絞り体験である。地域住民は3人招待した。榊野瑞恵さんは柚冬庵の代表であり、会社設立までのストーリーなどを話していただいた。細貝旬さんは地域協力隊の若者であり、木頭地域でのエピソードなどを話していただいた。中野威洋さんは現在横浜市在住の木頭村出身者である。今後どのように故郷に貢献出来るかなどのお話をいただいた。

【実績・成果】

12月におこなった名産の柚子加工商品の試食・試飲体験では、インターン活動の報告と説明会も実施した。展示品としてはインターンシップの実際の写真を公開するとともに、柚子加工商品をディスプレイとして置いた。また、室内には現地から取り寄せた柚子アロマを焚き、その香りを存分に感じてもらいながらの報告会となった。試食・試飲においても、普段はあまり口にすることのない柚子の原液から作ったジュースと柚子ジャムを付けて食べるクッキーを提供した。当イベントには学部学科を問わず20人前後の参加者が来場した。

1月に実施した体験型ワークショップでは現地住民との交流や実際に柚子に触れる体験を学生に提供した。当日は30人前後の参加があり、イベントに来ていただいた3名の木頭地域の住民と直接交流していただくよい機会となった。

私たち3人はインターンシップの経験を通して木頭を多くの人に知ってもらいたい、木頭に若者を増やしたいという思いを抱き、まずは学生に「木頭のよさ」を発信していくことを目標に2回にわたってイベントを実施した。結果として木頭柚子の効能や使い方、村が抱える問題の現状など示すことができた。また、目標であった現地住民と学生との交流を図ることができ、2014年度には私たちに続く3名のインターンシップ生を輩出することができた。木頭と学生（若者）との繋がりを継承することができたのは大きな成果であったと思っている。



12月試食会プレゼン



1月柚子絞り体験

【最後に】

今回の活動を通して、知らないことを伝えることや興味を抱いてもらうことの難しさを学んだ。しかし、3人で結束し、ただ単に説明して終わるイベントではなく、実際に参加者が手で触れ、目で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、味を楽しめるような趣向を凝らしたイベントを作り上げることができたことは私たちの成長にも繋がった。そして、木頭住民にとっても価値あるものとなったのではないかと考える。今後も若者と木頭との交流を途絶えさせず、木頭に活性化をもたらせるように活動を続けて行くことが目標である。2014年度のインターンシップ生とも交流を深め、活動を拓げることで木頭が理想とする姿（若者が多くいる）に少しでも近づけるように努めていきたいと考えている。

(国際学部国際学科 学生)

企画名：スタディツアー～バングラデシュの今を知る～

団体名：海外プログラム事業部

【活動目的】

アジア最貧国に属しているバングラデシュは、教育機会が均等に与えられない、十分な給与が得られないなどの理由から低水準の生活を余儀なくされている人々が多い。2011年にアジア開発銀行が公表した資料によると、バングラデシュ国民の75%を超える人々が1日に2ドル以下で生活する貧困層だと推定される。この状態を解消すべく、バングラデシュでは多くのNPOやNGO団体、社会起業家などが活躍している。また、世界的に見ても最低水準の労働コストの低廉さを活用しようと、多国籍製造業はバングラデシュへの進出に積極的である。今回のスタディツアーでは、

- ①発展途上国で起きている社会問題を実際に目の当たりにし、バングラデシュのためにできることを考えるとともに国際問題に対する意識を高める
 - ②現地で行われているNPO・NGO団体の活動を視察し、そのノウハウを学ぶ
- この2点をメインの活動目的としてスタディツアーをおこなった。

【事前学習会について】

国内でのボランティア活動とは異なり、海外でのボランティア活動は参加料金が高額であったり、治安面での不安があったり、異文化のタブーを知らないうちに犯してしまったりと不安要素が多い。万全の体制でスタディツアーに臨むべく、事前学習会を計3回開催した。国際ユースボランティアに参加し、バングラデシュに滞在したことのある本学学生の波多野俊さんからは、バングラデシュの概要（国民性、宗教、貧困など）について解説をしていただいた。ユヌスセンターの加藤桂衣さんからはグラミン銀行創設者のユヌス氏の教えやベンガル語のレッスン、バングラデシュの経済面、衛生面の問題について教えていただいた。また、明治学院大学准教授の齋藤百合子先生からはスタディツアーを実施する上での具体的な注意事項や現地の方と交流する上での心構えなどを示していただき、非常に勉強になった。事前学習会はスタディツアーを充実させるといった意味だけでなく、参加学生の不安を取り除いたり、緊張感を保ったりといった意味でも有効であると再確認した。

【活動内容・成果】

スタディツアーは2014年9月2日～8日の7日間に、引率学生6名、一般学生4名の計10名の参加学生を以って行われた。訪問団体はグラミン銀行（マイクロファイナンス）、BRAC（健康支援など）、JAAGO（教育支援）ダッカ大学（異文化交流）、E-education（教育支援）、赤新月社（災害支援）、雪国まいたけ（農業開発）の6団体である。基本的には団体を訪問し、代表の方のお話を聞き、その後参加

学生が質問していくといった方式で視察をおこなっていったが、JAAGOでは実際に教育支援を受けている子どもたちとの交流の時間も設けられ、またグラミン銀行・BRACでは農村においてマイクロファイナンスを利用している方々に直接聞き込みをすることができた。

活動を通して得られた成果としては、支援を受けている側の人々の声を聞くことができたことだろう。これらは企画段階では想定していなかったことである。日本においてインターネットや書籍からは決して得られない、発展途上国の実情を克明に知ることができた。また、事前に自分で調べた情報が間違っており、現地で団体の方から正しい事実を聞かされた。メディアから得た情報を盲目的に信じてはならず、実際に現地に行くなり当事者に聞いてみるといったことの重要性も実感した。

外国人に日本および日本人についてどう思うかということもたずねることができ、非常に興味深かった。特に宗教観や時間感覚については日本人とベンガル人では大きく異なっていて、日本人の常識は世界全体から見れば非常識なのかもしれないなども考えた。上記のいずれも日本にとどまっていたは自分が体験できないであろう貴重なものだ。

【今後の展望】

バングラデシュスタディツアーで学んだNPO・NGO団体運営のノウハウを、スタディツアー講演会やブログ・SNSなどを通して一般学生と共有する。多くの人がそれを知り、考察することで、新たなソーシャルビジネスのアイデアが生まれやすくなる。そうして誕生した画期的なソーシャルビジネスが、貧困や教育格差に苦しむ多くの人々を支援していく。その活動を、海外プログラム事業部が取り上げ大々的に発信していく——そのようなサイクルの完成が、海外プログラム事業部の究極的な目標である。そのためには継続的なスタディツアーの企画および実施が不可欠だ。遠くない将来に、貧困にも教育格差にも疫病にも直面しない人々が増えていくような世界に限りなく近づくべく、これからも海外プログラム事業部は精力的な活動をおこなっていきたいと考えている。



マイクロファイナンス融資を受けている女性の集会

(社会学部社会学科 学生)

企画名：職欲の未来～ジョブヨクのミライ

団体名：Link up

昨今、日本経済が低迷し企業に大きな影響を与えており、それは就職活動にも及んでいる。よくニュースや新聞で目にする“就活難”は、この現れでもある。新卒採用人数の削減により、就職先が決まらない大学生が増加している。この“就活難”問題が原因で自殺者が増えている。警視庁の自殺統計によれば2011年の大学生の自殺は、前年比101人増の1029人で、調査を開始した1957年以来初めて1000人を突破したことを内閣府が発表した。内閣府は自殺者が増加した原因のひとつに「雇用情勢の悪化」を挙げている。同じ警察庁の統計は、「就職失敗」による10～20代の自殺者数は2007年の60人から2011年は150人にまで増加していることも明らかにしている。就活難で自ら命を断つ学生が増えていると知ったこと、そして周囲の学生から「就職活動が怖い」「就職活動をしたくない」といった悲観的な意見や、「就職活動に向けて何をやっていいかわからない」「自分の将来をまだ想像できない」といった疑問の声などを多く耳にしたことが「職欲の未来～ジョブヨクのミライ～」開催のきっかけとなった。

企画名「職欲の未来～ジョブヨクのミライ～」の「職欲（ジョブヨク）」という言葉は、職、つまり職業や仕事に対して、欲を持って、自らが進んで考え、未来に向かって前進していく一歩になる企画という意味の造語である。自分自身と向き合い、周りに流されない自分らしい就職活動をおこなってほしいという想いを込めて企画を練り、2014年1月14日に明治学院大学の白金校舎で開催した。参加対象者は、本学学生と他大学の学生である。共催は株式会社フューチャーセッションズ、一般社団法人 SoLaBo、錫田くにビヨンドXプロジェクトで、Link up が以前主催した企画に参加してくださったのがきっかけとなった。各団体は、学生の就職活動支援はもちろんのこと、学生に限らず社会人に向けて「仕事とは」「働くとは」といったテーマのワークショップを数多く主催しており、本イベントの企画においてもアドバイスをいただいた。出会いに感謝しつつ、改めてお礼を申し上げたい。

「就職活動に対して不安や疑問を持つ学生に対して就職意識を変えるきっかけを提供する」という本企画の目的のために「なんとなくの就職活動はやめる」というテーマを設定した。他人と比べて就職の成功や失敗の基準を作ってしまったたり、周囲と同じことをして安心感を得るのではなく、就職活動とは、学生が自分自身と向き合う大切な時間であり、自分らしさをもって取り組むことが大切だと参加者に伝えることを意識した。

本イベントの目的・テーマを参加者に伝えるために企画内に盛り込んだことは2つある。1つ目は就職活動や働くことへのイメージを膨らませること、2つ目は社会人や同じ学生と対話



イベント参加者全員で記念撮影

する時間を設け、タテ・ヨコの繋がりを作るということだ。不安や疑問を解消することが学生を前向きな気持ちにし自ら行動を起こすきっかけになると考え、学生と社会人との交流の時間を設けた。また、自分の不安や将来に対する考えを整理するためにマイシートを配布し、3回のワークを通して考えたことを記入してもらった。ワーク①では、「あなたにとって理想の姿とは?」、ワーク②では「あなたにとって働きたい会社とは?」、ワーク③では「働きたい会社に入るためにあなたが今できることは?」という質問を参加者に投げかけ、具体的に将来について考えてもらった。その後、社会人参加者の大人メンターのみなさんに各テーブルについていただき、学生が記入したマイシートをもとに、不安や疑問などについてアドバイスやご自身の体験談をお話していただいた。イベント後には、有志参加の交流会を行い、学生と社会人の交流に会場が盛り上がった。

本企画には、学生45名（他大学学生を含む）、社会人20名の計65名が参加して下さった。社会人は、会社員や弁護士、起業家やNGO・NPOにお勤めの方など、様々な職業の方にお越しいただいた。参加学生からは、様々な職業の方とお話することで多様な働き方を知ることが出来たという感想が多く寄せられた。また、「就職活動に対するモチベーションが上がった」「早く働いてみたいと思った」などの感想も多く、就職活動に対するイメージを変えるきっかけになったと言える。

一方、アンケートから課題も見つかった。「席替えを多くしてもっとたくさんの学生・社会人と交流したい」「ワークの時間が短い」「金曜日の夜は社会人は忙しいため避けた方がいい」「成功だけを求めるのではなく、社会人の失敗談も盛り込む方がより働くことがリアルに伝わる」といった意見があった。いただいた意見を今後を活かし、よりよい企画作りに向けて努力したいと思う。

学生を始め、多くの方に参加していただけたことは、Link upにとって自信につながる企画となった。この企画の成功として考えられる要因は3つあると考える。1つ目は、多くの学生が関心を持つ就職活動を扱ったこと。2つ目に、就職活動が本格化する時期に実施したこと。3つ目に、就職活動を経験した4年生および就職活動を迎える3年生が中心となって企画したことで、学生目線の内容になったことである。また、早い段階からSNSやポータルへボン、メンバー各自での広報を始められたことで多くの参加者を集めることができた。これらの点は今後を活かし、就職活動について考える企画をこれからも提案したい。

(法学部政治学科 学生)

新入生のボランティア意識－「2014年度 新入生ボランティア活動アンケート」から

1. 調査の概要と結論

ボランティアセンターでは、新入生のボランティアへの意識や活動の意向を把握することを目的に、毎年4月の新入生オリエンテーション時にボランティア活動に関するアンケート調査を実施している。調査は2001年度から開始され、2014年度で14回目になる。

2014年度調査では、2975名の新入生から回答が得られ、前年2013年度の2708名より増加しており、回答率も95.7%と高かった。学科別回答者割合については、経済学科が10.6%と最も多く、次いで法律学科10.3%、社会福祉学科9.3%、社会学科9.1%、国際学科8.8%とつづいた。

大学時代でのボランティア活動希望者数は2246人(75.5%)で、前年2013年度調査の1943人(71.8%)より増加がみられた。参加したい理由では、上位1, 2, 3, 5位にはボランティアを通して、授業で得られないもの・考え方・知識・経験などを学んだり、広げたいといった理由が高い割合を占めていた。このことから、ボランティア活動の目的である「社会や人のために貢献する」という面に加えて、「ボランティアを通して様々なことを学びたい」というボランティア活動のもう1つの側面が新入生の多くに注目されていることが把握できた。本学ボランティアセンターにおいて、これまで取組み実績を積んできた活動プログラムの開発と活動機会の提供に加えて、ボランティア活動のもつ学習の側面を強化する仕組みの構築も必要であるといえよう。

また、関心があるボランティア活動分野の上位はこれまでも関心が高い「国際」「環境」及び、「まちづくり」の分野であった。被災地支援は前年度とほぼ同水準であり、「スポーツ」は増加がみられた。本学ボランティアセンターによる被災地支援活動は被災地内外において本学学生の支援活動が認められ、マスコミ等でも取り上げられる機会が多く、国内外から多くの視察や訪問者が続いている。被災地の状況変化に対応した支援・活動のあり方の検討が求められる段階にきている。

2. 調査結果

(1) 大学入学前のボランティア活動参加

大学入学前のボランティア活動参加の有無について、参加ありが43.8%（前年度43.3%）、参加なしが56.1%（前年度56.6%）であった。参加ありの割合は2009年度から2012年度まで減少傾向にあったが、その後若干増加している。参加活動分野では、環境が21.6%と最も多く、次いで、子ども19.1%、社会福祉18.1%、まちづくり14.5%と続く。

(2) 大学時代のボランティア活動に関する希望と参加理由

大学時代でのボランティア活動への参加希望者数は2246人(75.5%)で、前年2013年度調査の1943人(71.8%)より増加がみられた。参加したい理由では、第1位が「新しい出会いや経験を得たい」(51.5%)、

第2位が「ものの見方や考え方を広めたい」(46.4%)、第3位が「知識を広げたい」(38.9%)、第4位が「地域や人のために役立ちたい」(36.3%)、第5位が「授業では得られないものを学びたい」(35.3%)であった。

この調査の結果、ボランティア活動の目的である社会や人のために貢献するという面に加えて、ボランティアを通して様々なことを学ぶことができるというもう1つの側面について、新入生の多くが注目していることが把握できた。本学ボランティアセンターにおいて、ボランティア活動のもつ学習の側面を強化する仕組みの構築も必要であると考えられる。

また、参加したくない主な理由は、「時間がない」(34.2%)、「関心がない」(33.4%)、「きっかけがない」(25.7%)、「やりたいものがない」(16.1%)であり、これは大学内でボランティアしやすい環境が整い、活動内容に興味の持ちやすい工夫がなされれば参加に結びつくことが伺える結果であろう。

(3) 明治学院大学のボランティア活動の認知度

入学前に本学のボランティア活動を「知っていた」回答者数は1489人(50.1%)、「知らなかった」回答者数は1482人(49.8%)で、知っていた割合は前年度42.5%より大幅に増加した。本学ボランティア活動に関する情報入手は「大学ホームページ」が60.4%と突出して高く、次ぐ「オープンキャンパス」は24.5%で、学外に対しては大学ホームページによる広報効果が非常に高いことが把握できた。

(4) ボランティア活動関心分野

関心のあるボランティア活動分野では、「国際」(16.2%)が最も高く、次いで、「まちづくり」(11.5%)、「環境」(11.4%)、「子ども」(10.9%)、「文化」(10.9%)で、ほぼ例年と同じ傾向であった。「被災地支援」は7.4%と前年度7.2%でほぼ同水準、「スポーツ」が前年度7.5%に対し8.4%と増加がみられた。

(5) 「1 Day for Others」への参加希望

「1 Day for Others」への参加希望では、「参加する」(4.9%)、「可能なら参加したい」(27.6%)と参加に好意的な割合は32.5%と前年度32.7%とほぼ横ばいで、「情報を確認してから参加を考える」(51.9%)は前年度46.4%より増加がみられ、活動内容に対する関心の強まりが表れている。

(西村)